

縄文時代の蓮田—初めての居住と水からの恩恵(貝塚の形成)—

約15,000年前くらいから、気候は徐々に暖くなり、落葉広葉樹の森が広がりました。**この温暖化により**食料になる動植物や堅果類にも恵まれ、多くの食料を保存するすべを求めた人類は画期的な発明をします。それは『土器製作』です。

土器を使うことによって煮炊きが可能となり、食料の保存が出来るようになると、人々の定住化が進みます。縄文時代の幕開けです。(縄文式土器は世界的に見ても最古の部類に位置付けられた土器です。)

また、弓矢や釣針等の新たな道具も使い始め、トチの実のアク抜き技術も開発されました。これらにより季節ごとに異なる食料を組み合わせ、保存技術・貯蔵技術を向上させながら食生活の安定を計り、自然の恵みを巧みに利用しながら、定住生活を営んでいたようです。

市内では、宿上遺跡(しゅくがみいせき:大字黒浜字宿浦)・関戸吹上遺跡(ういんどふきあげいせき:大字関戸字吹上)などから縄文時代最古の石器(尖頭器(せんとうき)・局部磨製石斧(きょくぶませいせきふ))が、宿下遺跡(しゅくしもいせき:大字黒浜字宿浦)などからは、約9,000年前の市内最古の縄文土器が出土しています。この頃から温暖化が進みますが、7,000年前の早期後半には、天神前遺跡(てんじんまえいせき:大字黒浜字天神前)から市内最古の住居跡と貝塚(かいづか)が発見され、市内では草創期の遺跡が15ヶ所、早期の遺跡が59ヶ所(貝塚1ヶ所)発見されています。

約6,500年前の縄文時代前期には**さらに温暖化が進み、東京湾が現在の中川流域の低地から蓮田市域まで入り込んで**

ました。この海辺に沿って集落がつくられ、狩猟の他に魚や貝を採取する生活が営まれていました。関山貝塚(せきやまかいづか:関山1丁目)や黒浜貝塚群(くろはまかいづかぐん:大字黒浜及び江ヶ崎地内)、**国指定史跡黒浜貝塚**(大字黒浜字宿浦ほか、市役所南側)はこの頃の集落跡で、貝塚と呼ばれる食用の貝殻捨て場や関山式土器、黒浜式土器などがみつっています。また、前期の遺跡は73ヶ所(貝塚17ヶ所)確認されています。

約5,000~4,000年前の縄文時代中期には、宿下遺跡・馬込八番遺跡(まごめはちばんいせき:大字馬込字八番)など大きな集落が営まれるようになりました。この時期は全国的にも遺跡数が増加し、市内では105ヶ所(貝塚2ヶ所)確認されています。また、注口土器、石棒など祭祀(さいし)に使用されたと思われるものや、耳飾りなどの装飾具も現れるようになる時期です。約4,000~3,300年前の後期に入ると遺跡数は減少していきませんが、市内では80ヶ所(貝塚2ヶ所)確認されており、帆立山遺跡(ほだつやまいせき:大字馬込字八番)・根金大山遺跡(ねがねおおやまいせき:大字根金字大山)などで集落跡が確認されています。約3,300~2,400年前の晩期に入ると遺跡数は20ヶ所(貝塚2ヶ所)と激減しますが、雅楽谷遺跡(うたやいせき:大字黒浜字雅楽谷、東埼玉病院内)・久台遺跡(きゅうだいせき:東2,3丁目)という環状盛土状遺構を伴う遺跡や井沼遺跡(いぬまいせき:大字井沼字後塚)など後期から続く大規模な集落が存在します。



原始から現代までの平均身長の変化
「兵庫県立考古博物館コンセプトブック」より

縄文人の平均身長は上表のとおり158cm前後でした。弥生時代に入ると稲作などの文化だけでなく人も大陸から入り、平均身長も伸びましたが、江戸時代の平均身長は逆に低下していました。現代では食生活の変化などにより身長は高くなっています。なお、江戸時代人は身長が低くなったように感じられますが、農民と大名の格差が大きかったためです。

骨格では縄文人はエラがはり、眉間も深く、労働により筋肉が発達し、骨と筋肉の接合点も筋肉に引っ張られて盛り上がっていました。これに対し、弥生人は面長で縄文人に比べて、筋肉の張りも弱く、狩猟採集生活から農業生産生活へと移行したことが骨格からもうかがい知れる事ができます。また、江戸時代の大名家はアゴが非常に小さく裕福な食生活により退化が始まっていたことが窺い知れます。



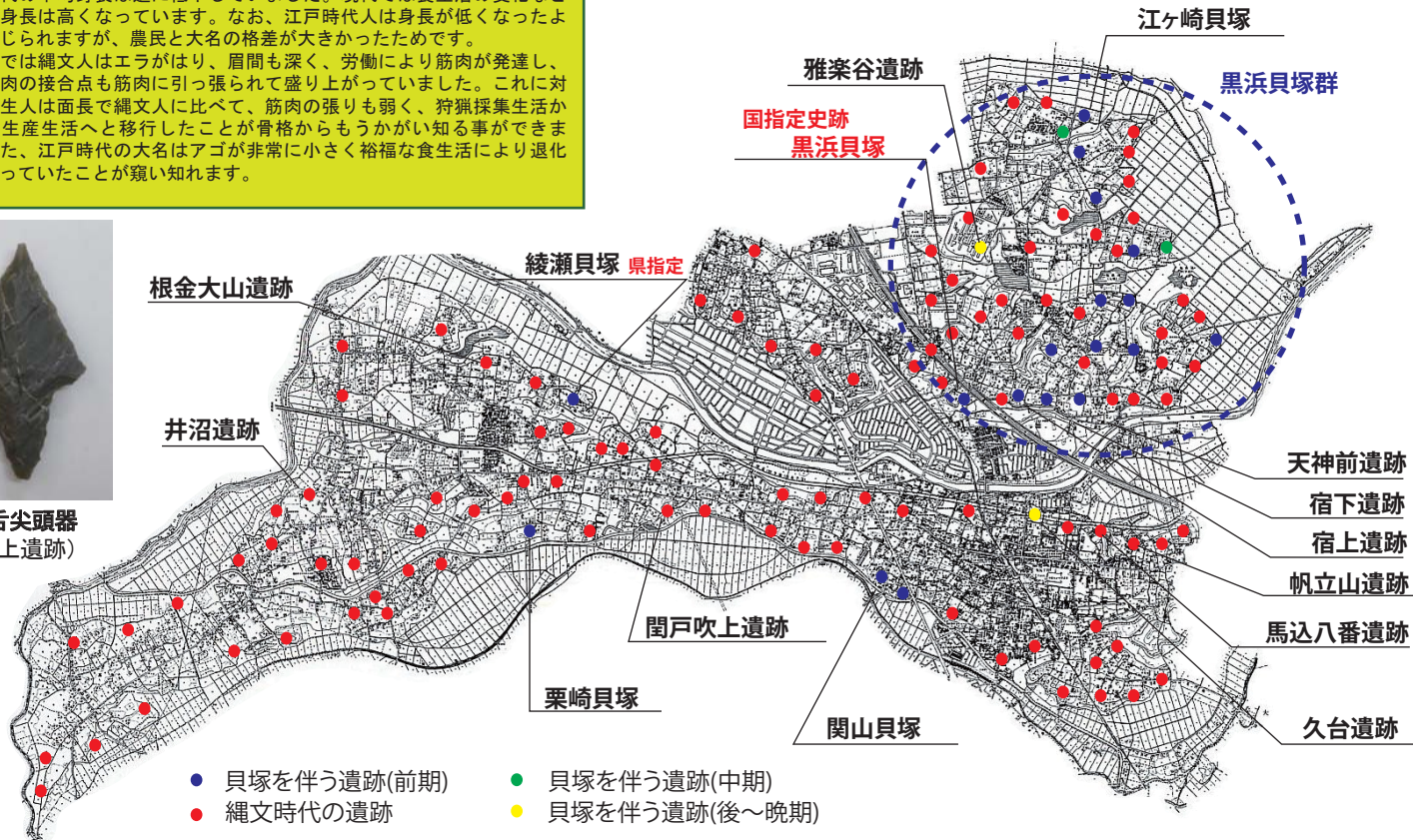
市内最古の住居跡(約7,000年前)
(天神前遺跡)



5号住居跡貝層検出状況(天神前遺跡)
貝が2回捨てられているのが分かるでしょうか?
貝と貝の間に黒い土が堆積しています。



有舌尖頭器
(宿上遺跡)



蓮田市内の縄文時代遺跡分布図

水からの恩恵 —初めての貝塚形成、その後も続く恩恵—

日本で最も古い貝塚は千葉県香取郡神埼町西之城貝塚（にしのじょうかいづか）で、約10000年前のもので、市内で最も古い貝塚は、縄文時代早期後半（約7,000年前）の貝塚が天神前遺跡（てんじんまえいせき：大字黒浜字天神前）で発見されています。しかしながら、貝塚としての規模は非常に小さく583個程（一抱え）であり、1回の調理で処理可能な量と推測されます。出土している貝類もハイガイが571個（97.94%）と大部分を占め、次いでカワアイ10個（1.72%）で、いずれも生息域としては、干潟から河口域に近い場所に生息する貝類であり、海が入ってきて間もない頃に採集されたものと推測されます。

市内に本格的に海水が浸入するのは、「縄文海進(じょうもんかいしん)」と呼ばれる縄文時代前期前半の関山式土器の時代(約6,000年前)に入ってからです。市内貝塚の分布からも分かるとおり、この頃の貝塚は関山貝塚など綾瀬川流域に多く、最奥部の貝塚の栗崎貝塚(くりさきかいづか:大字関戸字栗崎)、伊奈町大針(おおばり)貝塚はともに関山式期の貝塚です。これに対し元荒川流域では、最奥部に関山式期の貝塚は存在せず、国指定史跡黒浜貝塚の関山式期の貝塚が最上流部です。さらに奥部には県指定史跡綾瀬貝塚(あやせかいづか:大字貝塚字塚本)、白岡市正福院(しょうふくいん)貝塚が存在しますが、貝塚の時期ははっきりしていません。黒浜土地区画整理事業に先立つ発掘調査の貝塚データからは、早期後半から前期初頭関山式期までは、ハイガイ・マガキを主体とする貝塚が多く、黒浜式期(約5,500年前)から次の諸磯a式期(もろいそえしき:約5,000年前)にはアサリ・ハマグリなどを主体とする貝塚も発見されており、海がより安定して蓮田の地に恵みをもたらしていたことが窺えます。

この後、市内に再び海水が入り込むことは無かったようですが、**直近の地**までは海があったようで、市内でもその影響が確認されています。縄文時代中期(約4,000年前)にも蓮田市内で**貝塚が3ヶ所確認**されており、**ヤマトシジミ**

を主体とする貝塚であり、周辺でも同様な貝塚が発見されていることから、元荒川の中川低地出口付近に河口域があったことが推測されます。後期(約3,000年前)～晩期(2,500年前)でも貝塚が2ヶ所発見されていますが、いずれもマシジミ・チリメンカワニナ・オオタニシなどの淡水産の貝類です。貝塚内からは海水産や外洋産の貝殻が発見されており、海とのつながりが推測されます。また、久台遺跡(きゅうだいいいせき:東2丁目)では、この時代から始まる製塩に使用された土器も多く発見されており、付近に河口域があったことが推測されます。縄文時代後期には中川低地の下流域(国道16号線付近)までは海が浸入し、さいたま市岩槻区国指定史跡真福寺貝塚ではヤマトシジミ主体の貝塚が形成されており、付近に河口域があったことが推測されます。

周辺地域ではこれ以降の貝塚は発見されていませんが、市内ではまだ確認され続けますが**淡水産の貝類**です。弥生時代には「弥生の小海退(しょうかいたい)」と呼ばれる寒冷化が起こり、海が再び引き低地の乾湿化が進み人々が低地へと進出していきます。この頃の貝塚は発見されていませんが、次の**古墳時代後期(約1,400年前)**には再び荒川附遺跡(あらかわづけいせき:関山3,4丁目)で形成されますが、**イシガイなどの淡水産貝類**です。**続く奈良時代の荒川附遺跡の貝塚でも同様の構成**です。同じ遺跡から発見される時期の異なる貝塚ですが、いずれからでもハマグリが発見されており、海との影響と考えるより河川交通上の河岸場としての役割が荒川附遺跡にあったことが推測されます。

その後も平安時代の椿山遺跡(つばきやまいせき:大字黒浜字椿山、市役所内)でイシガイが、江戸時代の宿下遺跡・閨戸足利遺跡(うるいどたりいせき:大字閨戸字足利)などでオオタニシの貝塚が発見されています。このように蓮田市域の先人達は、海があった海水産貝類だけでなく海が退いた後の淡水産貝類も食し、**周辺地域では見られないほどの水との関わり方**が発見事例から推測されます。



縄文時代前期の推定海岸線(地形から復元した推定線) (東京遺跡情報2000より)

縄文時代前期海岸線と現在の海岸線